



なげき 1938

第15号

1970. 11

書

評

編集・発行  
関西大学生協同組合  
組織部  
「書評」編集委員会  
編集人 高尾 進

吹田市千里山17  
TEL 388-1121  
内線 776

## 沖 縄

〈72年返還〉と公・災害型コンビナートの進出

末吉 栄三

おきなわ・沖縄・オキナワの旅

沢井 良政

## 書 評

坂本慶一著 〈マルクス主義とユートピア〉

川崎 一郎

梅本克己著 〈唯物史観〉

隅田 一

黒田寛一著 〈毛沢東神話の破壊〉

久礼 勉

高島善哉著 〈民族と階級〉

はやし はじめ

沖縄関係出版文献目録

〈書評〉バックナンバー／掲載論文一覧

カットはケーテル・コルヴィッツの作品より

書籍購入グループを創設し  
一括共同購入を推進しよう  
書籍の生協一元化をかちとろう

〔A〕 國家は、一般規定としては暴力機構であるといわれる。

十九世紀資本主義の成立、確立期に、市民社会と國家との対立で、市民社会の本来の優越が政治的思考の基本的カテゴリーであった。ここで市民社会とは、*「経済人の王国」*のことであった。

資本の非人間的な諸法則と諸過程のもと、*「アダム・スミスは、生産者と商人とからなる社会を基底に、國家はあらゆる限られた機能のみをたす夜警國家と考えた。ヘーゲルは、このアダム・スミスを継承し、市民社会と國家權力の対立のうえに自分の政治学体系を構築した。マルクスは、当時の市民社会の國家への對置を受け入れ、」*「実際には國家が市民的生活によってまとめられているのに、逆に市民的生活が國家によってまとめられるにちがいない」と、こんにちでもかながえているのは、政治的迷信にすぎない」（「聖家族」）とするだけでなく、市民社会は「生産力の一定の發展段階の内部における諸個人の物質的交通全体をつんでいる」、國家は「社会の一定の階級が支配」が「実践的・觀念論的な表現もつところの形態であった」（「ドイツ・イデオロギー」）。そして、労働者階級が權力にいたるとき、市民社会における敵對關係の表現形態の政治權力が存在しないであろうと考えた。

これは市民社会と國家の對立が、市民社会の國家への解消によってではなく、國家の全体としての社会の解消によって、解決されるということである。

この客観的な經濟諸法則の存在とそこから引出される〈*「予言」*〉を、現実の世界としての構築へ転化する転回点、それこそ、レーニンが「國家と革命」―プロレタリア革命によって破壊されるのはブルジョア國家であるとともにプロレタリア國家の止揚のテーゼ―の基本的な主題に他ならない。

〔B〕 ブルジョア國家としての國家の独自の性格とは何であるのか、或いはブルジョアジーという支配階級の、あるいはその支配の仕方の質的独自性とは何であるのか。この問いはプロレタリアートに主観的生産力という獨特の被支配階級の質から規定されている。それでは、ブルジョア階級の支配の方法はどこにその独自の性格があるのか。資本は本来、*「世界的」*なものであるのに、ブルジョアジーはこの〈*「資本の世界性」*〉と對立する〈*「國家」*〉をなすにゆえに必要とするのか。「外部へむかつては民族としてたちあらわれ、内部へむかつては國家として編成」（「ドイツ人」）するの、である。

〔C〕 夜警國家段階の國家、あるいは資本主義体制下の社会主義内閣は、ブルジョア内部の矛盾するための國家權力の外的性格（*「外的処理機關」*）としての性格の反映である。これはブルジョア政治過程が、その基盤―採取過程から獨立してあたかもそれだけで盲目的に動く自律的運動過程をなしているかの狂妄へ陥没であろう。このようなブルジョア政治過程の虚偽性と獨立性を満足させるのが外的機關としての議會制である。つまり、ブルジョアの民主議

## 〈國家論〉に関する断章

卷 頭 言

会制は政治過程の虚偽性と搾取過程の実質性を適当に、自由に編成、組立てるのである。

だが帝國主義段階では、ブルジョア政治過程の虚偽性、独立性が維持しえなくなつて、經濟そのものが、經濟によつて外的な力に國家によらずして持続できなくなつたのである。というのは、帝國主義段階は、經濟法則の実現そのものが經濟法則の実現を破壊するような段階であるからである（例、独占資本段階の中小企業存続、集中集積そのものが非集中、非集積を必然的に生み出す）。

國家權力へと転化する事によつて、資本の運動そのものなかに内在化してゆく必要が、プロレタリアートの運動や生産活動を國家が規制していく必要が、従つて國家はプロレタリアートを彈圧するだけではなく、同時にプロレタリアートを國家權力の内部に包摂する必要がある。ブルジョア國家は、議會鬭争、改良主義、社会立法等の行政的政治で個々のプロレタリアを國家權力と直結させる（一國家の公共性）政治領域を設定することによつてプロレタリアートの政治鬭争を、虚偽的な表面的なものにし、こうして彼らの（必要）を満足し解決する。

これが帝國主義段階のブルジョア國家のあり方である。本来外的な國家權力が内的な權力に転化してゆくからこゝまますます外的になつてゆかざるをえない。というこのブルジョア國家權力の矛盾はその爆發によつて解決される他はない。だからこゝその爆發にそなえて、ブルジョアジーは、警察、軍隊を要するに武力を準備していなければならぬ（例、防衛白書、日・韓・台の三角の柞葉、七二年の沖繩返還、忍草、三里塚）。

そして、日本の特殊産物の無自覚的、無感覺的な精神的風土形成へ、階級社会の産物の排外主義、民族主義、死の美化の思想、虚無的、機械主義的思想とそれぞれの色彩を重ねて徘徊している。

〔D〕プロレタリア独裁の矛盾とは何か、また國家独占資本主義段階、プロレタリア独裁段階でA階級とつてはどのような考えられているのか。

プロレタリア独裁段階では、ことに具体的に存在もし表象もできる階級というよりもむしろ階級あるいは階級矛盾は体制的なもの、構造的なもの、組織されたものとして現われている。

プロ独の基本矛盾は、ブルジョア的なものとプロリア的なもの対立矛盾である。それは社会主義建設の基盤は等価交換（「ゴータ綱領」労働能力による労働賃金の支払取得）にあるが、これはいうまでもなくブルジョア原則である。等価交換があるかぎりブルジョア原則が生きているのであり、問題は、この等価交換をどうして否定するのである。それは労働力の交換価値の止揚するものであり、さらに主体的生産力が物的なもの物的生産手段を形成、支配するプロレタリアートの主体的形成を、どのようにおこなうかである。

現代は、序幕以降の時である。



失 業 1925

末 吉 栄 三

(工学部建築科都市計画助手)

## 沖縄

# 「72年返還」と・災害型コンビナートの進出

## 非常識な誘致政策

### 公害源としてのコンビナート

現在、日米の独占資本、日本政府、琉球政府（沖縄県当局）の四者が一体となって推し進めている沖縄の「工業開発」政策は地域住民の生活環境を維持、向上させていくべき都市計画の立場からみると非常識というよりも、その結果を想像

すれば恐ろしさと怒りさえ感じられるものである。すでに多くの人たちが指摘しているように、本土各地で行われてきた巨大独占資本による地域開発（拠点開発方式）政策というものがその地域に残したものは、三重県の四日市市、岡山県の

倉敷市などに見られるごとく、企業のための生産基盤整備や「奨励金」（企業から固定資産税として自治体にはいった税金の何割かを奨励金と称して各企業に与える）等による自治体財政の慢性赤字化、その結果としての市民の生活環境（保育所、幼稚園、学校、病院、日常生活に使う道路等）の整備の立ちおくれ、放棄、さらに加えて大気汚染、水質汚濁等に代表される公害、石油タンク、化学工場、爆発等の災害やその日常的危険性の増大であった。

本土においてそのような地域開発（突

はすべての面での地域の破壊）政策が各方面の人びとから徹底的に批判され続けているその時に琉球政府（沖縄県当局）はなんらの科学的調査らしい調査もなく、五年後、十年後、二十年後の沖縄の総合的な都市計画もなしにガルフ、エッソ・スタンダード、東洋石油（カルテックス系）、琉球石油、琉球セメント、日石の合弁）、カイザー等の石油化学産業、米國最大のアルミメーカー・アルコア、それに対抗して進出してきた本土のアルミニウム五社（日本軽金属、昭和電工、住友化学、三菱化成、三井アルミニウム）等

の進出を許可している。石油にアルミといえは（それに当然付随する電力工業と相伴なって）だれでも知っている典型的な公害、災害型産業である。以下防災都市計画の立場からみた現在進められつつある沖繩の「工業開発」の問題点（というよりもはっきりと危険性といった方が正しい）を述べてみたい。

## 激化する公害闘争

(一) まず米國や日本本土（東洋石油における硫石等の沖繩地元資本を含む）の問題点であれ、沖繩を臨海型工業（コンビナート）の「適地」と評価している。その理由は、低賃金で豊富な労働力という社会的条件や、将来は中国までも考慮に入れた東南アジア市場への門口という地理的条件もあるが、最大の利点は地耐力の良好なさんご礁が沖繩の島しまをとりまいており、しかもそのさんご礁の外は急激に深い海溝になっているという沖繩の自然的条件による。さんご礁埋め立ての費用は日本本土の臨海工業地埋め立ての場合の十分の一以下で済むし、陸地に近く、しかも深い海は二十万トン以上の巨大タンカーの入港可能な港湾を作りやすい。そのような沖繩の社会

的、地理的、自然的条件に加えて、日本本土の各地で起こっている市民の公害闘争の激化で石油化学、アルミ等の公害害型コンビナートの立地が困難になっていることである。

六〇年代の公害害まきちらし型地域開発は各地の市民の公害反対闘争を激化させ、いくつかの地域においてはコンビナートや公害害型企業が市民運動によって追いかえされた。そこで新全国総合開発計画（新全総）においては、これまでの日本の比較的辺地といわれた九州・北陸・北海道等に現在の各地のコンビナートの十数倍もある巨大なコンビナートを造成し、企業に提供しようとしている。公害の恐ろしさの認識の比較的少ない沖繩が「復讐不安」につけてこまれて、そのような公害害型コンビナートの「適地」に選ばれたのは以上のような理由による。日経調査団は「沖繩住民が公害に過敏であつたりすれば、沖繩の産業開発はそれだけおくれ、本土との格差はせばめられず過疎現象はいつそう進む」と警告に脅迫しているし、新潟水俣病の当事者であり、現在、公害訴訟で告訴されている昭和電工の安西社長は「沖繩を企業の天国にしなればならない」とまでいっている。（昭和電工はことしの八月に広島県福山市からも進出を断わられているが本土アルミ五社の一員として沖繩には進出してくるようになっていた。

## 残された「自然」

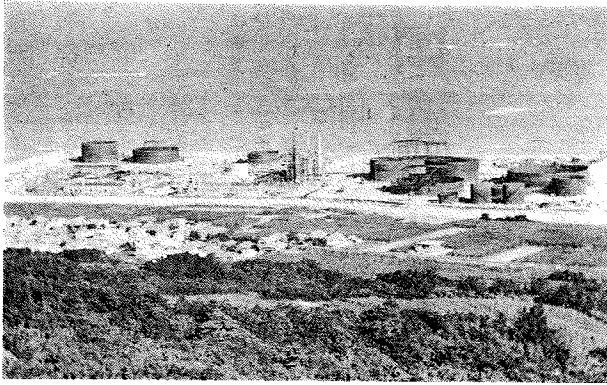
(二) 以上のように「適地」とは巨大独占資本（企業）の側からの見方であり、地域住民の側のそれではない。ここで忘れてはならないのは自然の価値の問題である。さんご礁や深い海という企業からみた立地上的「適地」は地域住民の側からみれば、漁業生産の場であり、子供たちの海水浴場であり、つり等のレクリエーションの場である。本土のどのコンビナート都市の側でも、海は石油でよぐれ、石油臭い魚しかとれず、沿岸漁業は全滅している。それに対して企業と自治体は漁業組合に補償金を出したりしているが、美しい海や山の景観を破壊され、さんご礁でのイソアそびや海水浴の楽しみをうばれた無数の住民や子供たちはいかなる補償も不可能である。現にガルフの「占領」した平安座島を中心にした数個の美しい島々からなる海域は与勝海上政府立公園に指定されたまだ四、五年も経過していないし、たった三地区しかない政府立公園のひとつである。それに東洋石油とエッソによる廃液は与勝原の海水浴場をほんの近い将来に石油臭い浜に変えるだろう。

現在爆発のないきおいで伸びている自

然探求型レクリエーションの需要をまかなえる場所は日本全国で急激に減少しており、絶望的狀態に近づきつつあるが、沖繩は日本における残り少ない非常に貴重な自然探求型レクリエーション基地の一つであり、日本の全国的スケールでも絶対に公害害産業に破壊させてはならない場所である。

自然というものは一度破壊される元のバランスをとりもどすには非常な努力を重ねて短くて百〜二百年の年月を要する。それを企業優先主義で指定したばかりの政府立公園内に巨大な石油コンビナートを作らせる琉球政府とはこれのため行政をしているのだろうか。きびしく追及したい。

また沖繩本島の東海岸一帯を石油化学コンビナートを軸にした巨大工業基地に、西海岸を観光レクリエーションの場所にしなさいという意見も聞いているが、この論理は二重の意味で批判されるべきである。まず沖繩本島の幅は狭いところで四キロ、長いところで十キロ内外しかない。ところが大阪の堺や岡山県の水島地区のコンビナートの例のみならずようにコンビナートから七キロ〜十キロの地点でもSO<sub>2</sub>濃度は年々上昇しているし、短時間濃度はコンビナートのすぐ近くの最大汚染地区と同程度に上がっている。ちなみにエッソの工事の進んでいる西原村から与那原町まで二〜三キ



中城公園より東洋石油の建設相場を見る。  
手前に見えるのが久場の集落。コンビナートはすぐ目の前である。

口、首里まで五キロ、那覇の市街地まで八〜九キロ。金武湾から大浦湾にかけての東海岸から西海岸のムーンビーチ、伊武部ビーチ、万座毛、名護湾にかけての沖縄海岸政府立公園までは四〜八キロである。もし西海岸への汚染をさげようと思えば、非常に低い煙突にせざるを得ずその時は東洋石油の久場、泊やエツソの伊集、掛久保等は人の全く住めない地域

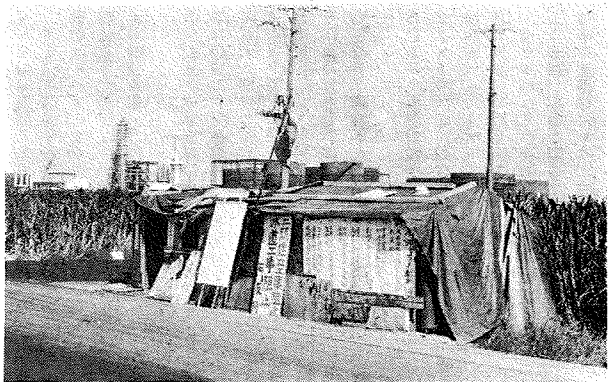
### 弱い琉球政府の態度

（三）私がつとも気になっているのは、琉球政府の災害防止への考慮が非常に弱いことである。異常なまでに楽観的にみえる。都市の防災計画を考える場合の大きなファクター（要素）の一つに、「災害ポテンシャル」と呼ばれるものがある。それは簡単にいえば、「災害を起こしやすい度合い」といってもよい。たとえば同じような一つの火事が発生しても、鉄筋コンクリートの建物が十分な隣接間隔を保ってたっている地区と木造住宅が密集している地区とでは、明らかに後者の方が大震災になるポテンシャルは高いし、集中豪雨による洪水も山手の高台と下町の低湿地とは、大災害になる度合いが違う

ことには簡単に理解できよう。また都市内のガソリンスタンドの増加や、それ自身小型のガソリンタンクともいえる自動車による消化活動への影響やそれ自身の発火による災害の急速な拡大を考えれば、明らかに都市災害ポテンシャルを高めている元凶の大きなひとつであるといえる。沖縄の災害ポテンシャルは異常なほど高いといつてよい。まず基礎的要件としては、沖縄の人口密度の高さがあげられる。一九六七年の調査によると、沖縄県の人口密度は一平方キロメートル当たり四百十九人であり、これは全国的にも東京、大阪などを含んだ人口密度の上位十都府県にはいるし、那覇市の人口密度にいたっては一平方キロメートル当たり二万三千三百四十四人で東京都よりも高く全国一の高密度都市といえる。最近、那覇市周辺へのスプロール（周辺へ無秩序にのびていくこと）が進み、その地域の密度も急激に上昇している。沖縄はそのように全国有数の高密度居住地域であり、それだけでも、災害のポテンシャルは非常に高いのであるが、そのポテンシャルを、さらに異常に高めているのは、米軍基地の存在である。嘉手納基地（ここから連日B52がベトナムの爆撃に飛び立つ）のB52の墜落、爆発は核兵器の存在によって、沖縄全島を恐怖のドン底にたたき込んだし、小学校へのジェット戦

闘機の墜落による多数の児童の死、パラシュート部隊の事故による少女の死、また、米軍石油タンク基地からの市街地の下水道へのガソリンの流出、さらに米本国への逆搬入をアメリカ人自身によって拒否され、いまだ沖縄から撤去されていない毒ガス兵器の存在など、瞬時にして悲惨な大災害を招く沖縄の災害ポテンシャルは日本全国の各都道府県において、その類例をみない。そこへもつてきて、さらに石油、アルミの危険度の高いコンビナートの建設などは住民の安全を少しでも考える自治体のすべきことではない。東洋石油から久場の部落实ではなんとたったの七〇メートル。新潟地震における昭和石油ガソリンタンクの火災が示したように東洋石油のタンクに爆発でもあれば久場の部落实などは隣間にして大惨事となるだろう。（米軍機のコンビナートへの墜落の危険性は十分にある）

現在でも異常に危険な基地の島に公害、災害型産業など絶対に置くべきではない。沖縄の米軍基地は現在百四〇カ所、広さは約二億六百七十五万平方メートル、沖縄本島の全面積の一三・八%（これは戦後沖縄住民から米軍に接収された賃借用地の面積であり、戦前からの園、県有地は含まれていない。——これらの広大な園、県有地は米軍のゲリラ訓練所に使われている——米軍側の発表によっても、「沖縄本島の二五%の土地が



見聞争小屋を通してコンビートの建設工場を見る。周囲は一面塩水が溜まってウキビが枯れる。埋立地が海岸より高く、東洋石油の工場が、サトウキビが枯れる。

④ 本土においては、

いま公害、災害に関しては、企業の無過失責任が追求されているが、私はその無過失責任の対象に、そのような公害型企業を住民の反対を無視して誘致した、自治体の責任者も入れるべきだと思っている。自治体や企業が「公害、災害は出さない」というのは当然のこと、最初から出すというバカはいない。

忘れてはならないのは四日市、倉敷市などのは、では典型公害都市となつてしまったすべての都市において企業誘致のため作成された「地域開発」計画書には、そのい

米軍に管理されている」であり、しかも住民の意思に反して、現在基地はますます拡大、強化が進んでいることを嘉手納米軍基地のマーフィ司令官も述べている。

## 無過失の責任追求を

か二二%、国庫四〇%、県三%、残り約三五%は市の負担であり、しかも計画完成までに二十年を要し、それまで現在の

公害患者がはたして生きておられるのか、といわれている。肝心の公害地区住民の移転計画も遅々として進まず、暗礁にのりあげているのが現状である。

以下の新聞記事を琉球政府の首長、中城村の首長は真剣に読んでいただきたいと思う。

「『この公害は全部私の責任です』四日市の名誉市民の第一号、八十三歳の吉田勝太郎さんは老いの顔をくもらせた。『まさかこんどいことになるとは夢にも思いませんでした』。三十年から四十年間市長として、工場誘致にばかり回り、わが国最大の石油コンビナートの町に仕上げた功勞に贈られた『名誉市民』の称号、それがいま『後悔の重み』となつてこの肩にのしかかる。(四十二年二月二十日朝日新聞)」

## 小さな闘士たちへ

⑤ 最後に、初の「公選主席」、屋良「革新」知事のしむけた機動隊に弾圧され、多数の逮捕者を出しながらも、くじけることなく「闘争小屋」を守りぬき、さらに闘争を持統していく意志を胆々と語つたおばさんたち、「少年少女行動隊、生徒部」の小さな闘士たちへの連帯の意をかたく、私達も具体的な行動、

研究、調査を進めていきたいと思つている。

注① その典型例として三島・沼津のコンビナート反対闘争がある。

注② 現在、東注石油やエッソの埋立工事が進められている場所は、本土での消費のかなりの部分をしめる沖縄の「もずく」の名産地であったが、その生育地は残らず破壊されてしまったし、琉球列島でよくとれた「カニ」も半分以下、他の漁獲も着工前に較べて半減した。この漁業の補償の問題についても、地元漁民が任意組合しかもつていなかったのにつけてこれ、琉球政府と東洋石油は「法律上の漁業権はない」との判断のもとに、地元の人々には何の事前連絡もなしに工事を強行した。その後漁民の代表が何カ月も東洋石油と交渉を行なった結果、やつと四十人の組合員に一人当たり約六百ドル(約二〇万円)の補償金が出ただけである。「食うに困つた漁民は交渉が長びくのをもちこたえられなかった」朝日新聞(一九七〇・一・四)

注④ 那覇からも近く、砂のよくついた遠浅の海水浴場で児童、生徒の



ふみにじられし者のための習作 1900

水泳教室にもよく使われてきた。周辺の海の色も全く美しく「龍宮城」の伝説の地と伝えられ筆者自身もよく泳ぎに行った場所である。

注⑤ 近くの例では、堺・泉北臨海コンビナートの集合高煙突によるSO<sub>2</sub>の拡散の影響で、金岡地区でも近年SO<sub>2</sub>の濃度が急激に増大している。

注⑥ 東石の煙突は三三メートルであり、最初から目の前の久場の集落への犠牲を強いているといえよう。なお沖縄の公害闘争や「経済開発」に関するの参考資料は最近かなり出てい

る。以下はその数例である。  
○共和国 三 (合同出版)  
○物呉ゆすと……沖縄解放への視角 (沖縄研究会編、田畑書店)  
○沖縄経済開発の原則——久場・宮本 (

世界七〇年七月)

○沖縄の経済開発に提言する。宮本憲一

(世界七〇年一〇月)

○沖縄——高まる日米資本の足音・福本

註 (世界七〇年九月)

○沖縄経済自立の苦惱 (上・下)・西岡

正 (朝日ジャーナル・七〇・

四・一九・二六)

○石油基地をめぐる攻防・守礼六平太

(朝日ジャーナル・七〇・一

・二五)

○七二年返還をひかえて・長嶺一郎 (ア

ジア・七〇年九月号、アジア

評論社)

○月刊地域闘争 (ロシナンテ社)

(この文章は沖縄の新聞「琉球新報」

一九七〇年九月四日・五日の両日に

「復帰と沖縄開発」第七部「専門家の

提言」として掲載したものに少し加筆

したものです。)



# おきなわ・沖繩・オキナワの旅

## ぼくの歪んだ“日本人意識”

沢井良政

いつのことであったか、うっ積した大衆のエネルギーが東京で、大阪の御堂筋で爆発し、大阪の地下鉄難波駅前で学生と大衆とが八日の丸Vが焼かれているのを歓声でもって見守っていた時、八日の丸Vの持つ意味あるいは八日本人Vであることの意味が内部から問われているのだと考えることがある。そのあまりにも根源的な問いは、激烈な学園闘争、街頭実力闘争の過程では明確な型でもって、ついに浮び上がることがなかったが、今秋の出入国管理法案粉砕闘争を契機として、再度、八すべての日本人Vに問いつめようとしている。しかしその前に、戦後二十五年間一貫して、戦後民主主義の矛盾を負い、日本本土に安穩と生活している日本人に対して、復讐するところ

の本土とは何か、日本人とは何か。という鋭い問を投げかけているのはほかならぬ沖繩列島に住む人々ではなからうか。第一次、第二次琉球処分そして第二次世界大戦で沖繩住民のうち一四万人も非戦闘員が米軍、日本軍によって殺されあるいは集団自殺に迫られた事実が、いまなお決して消えさることのない悲劇として存在するのだけれども、過去の痛みがあまりにも静かにおさえがたい憤怒を無理やり抑えて、沖繩の人々によって語られるとき、日本あるいは日本人そのものの意味を問わずにはいられない。

僕は、八月三日から九月八日まで、沖繩本島、石垣島、竹富島を旅行し、米軍基地の膨大さと戦争兵器に対する恐怖

感に圧倒されつづけ、またそれ以上に自分の非力さと無知を恥じずにいられたのだが、この一文は、僕の無知無神経ぶりを暴露したものである。八月二日神戸港を出発し、定員以上の人間

をつめ込み、体臭とはこりと熱気の絶えない船倉の中で僕はふと考える。僕は何のために沖繩へ行くのか？しかしこの声は次の声によって簡単に消されてしまう。君は何のために沖繩に来るのか？何か重苦しいものを感じつつ、僕のあいまいさに対する無言の批判や、彼らが拒否しているのではないだろうかと思う。しかし日本本土を離れるに従って僕のあいまいさや、拒否されていることを認識するより、大自然の驚異、すなわち夜空の無数の星くず、海と空と天才的な雲しか見えない広横たる地球の一表面等が、旅行者でしかありえない僕を無邪気にさせ

た事は否定できない。二四日午後一時頃那覇港に到着、普段は米国原子力潜水艦が停泊しているのだが、この日は姿を

見せず、那覇空港における第五一迎撃隊の戦闘機の尾翼が異様に光り、俄達を威圧していた。この那覇港でコバルト60が発見されたのは最近のことだ。「那覇港で働く潜水夫たちが体の異常を訴え、沖繩原水協は、彼らが採取した海底土のうちから検出されたコバルト60が米琉合同調査の結果よりも数倍濃いものであることを証明した。コバルト60に汚染した泥が繰りかえし採取され、その汚染を体内にもちこんで蓄積したテラピア魚、ムラサキ貝が確認される。そして米軍は、潜水夫たちの異常が放射能に由来しないと説明し、本土の原爆病院へ彼らを送り出そうとする全軍労のプランを押しつぶす」。沖繩の民衆が原潜の入港を拒む力を持たぬ以上、港の泥の汚染、魚貝類のコバルト60の蓄積は、なお進行するのみだという恐ろしい認識だけしか彼らには残らないし、米軍、そして自分の無力感に対しての怒りが体内に暗く蓄積するだけだ。

六八年十一月十九日、嘉手納基地から発進しようとした米戦略爆撃機B52が上昇しきれず失速し、基地の東側弾薬庫

入ゲート近くに墜落し、と同時に十数回大爆発した。その残骸は今もある。このB52の大爆発によって、ベトナム戦争と直接かかわっている事実によるはかりしれない恐怖感と、それ以上に知花核貯蔵庫に万一引火した時の身の毛もよだつ恐怖感を沖繩の人々は、具体的に怒るといふより沈黙でもって耐えねばならなかった。つまり、沖繩の民衆が核及び嘉手空軍基地を撤去させる力をもたぬ以上、米軍による核戦略体制の強化、嘉手納基地の強化はさらに進行のみだという恐ろしい認識だけから彼らには残らないし、米軍をして自分の無力感に対しての怒りが体内に暗く蓄積するだけだ。このように、沖繩の民衆は現実の重みの中で、体内に深く沈んだ怒りをはきだす有効なすべも知らないし、「戦争のない世界を作るより、核エネルギーを吸収する装置を早く発明してもらいたい気持ち」ともならず、核に対する恐怖心は鋭いものがある。従って彼らは、日米共同声明の偽善性をいち早く敏感に洞察し、それ以上に、日米共同声明路線上で茶番劇を演じている本土及び沖繩革新政府にやるかたない憤慨をいだいているは当然である。なおさら、僕達が報道や雑誌評論で理解したつもりで、沖繩の人口に連帯を求め、共に闘うぞ、という安易な言葉は、決していえるものでないし、沖繩闘争勝利をいくら大きな声で張

り上げて、沖繩の民衆は何も答えてはくれないであろう。否、本土の人間はやはり何も理解してはいないのだと、うなだれて立去っていくのみである。あたかもあの全国学園闘争(今も闘われている)の中で進歩的文化人と称されているが、我々の全存在を賭けての闘争を全く理解できなかったように。真の連帯とは署名やデモに参加することではなく、また一億円カンパ言々でもなく、自らの内なる沖繩の結実であり、身をもっての闘争であろう。

七二年本土復帰が、米軍基地の合理化とさらなる強化、そして自衛隊の進出をもたらすという事と共に、一方では基地経済からの脱却、沖繩経済の復興という口実で、ゴルフ、エッソ、カルテックス等の石油企業、それに関連したアルコア(世界最大のアルミ企業)や本土アルミ五社(日本軽金属、昭和電工等)が急速に沖繩に進出し、沖繩の地形を愛するほど歴大なコンビナート基地を保証している。僕は北中城村字久場にあるカルテックス石油基地反対同盟の闘争小屋を訪ねたが、石反同盟の人々は公害基本法阻止に向けて琉球立法院へ行っており、その場にいた五十才位の農婦と思われるおばさんいろいろの説明を受けた。すなわち、屋良政権が公害再生産企業である石油とその関連企業、イタイタイ病の発生源企業である昭和電工等の誘致を決定

し、しかも公害基本法(本土における公害基本法も無茶苦茶だが、沖繩のはもっとひどい)を積極的に対峙し、いわゆる革新政党も同様で、石反同盟は革新政権、政党と真向うから対立していること、そして石油基地粉砕実力闘争で五名の学生、労働者が起訴され裁判中であること、四日市や堺コンビナートの状況を映画等によって大衆的に学習していること、少年少女行跡隊の編成等。苦渋に満ちた鋭い口調と、汗とはこりてよごれた彼女の顔か目の前に敢然と存在している石油資本との闘い、権力との闘い、そして革新政権、政党に対する不信をはっきりと物語っている。この一農婦は、水資源、電力等の管理権を一切握っている米軍の庄政と、米独占資本、本土独占資本

かかっている二重、三重支配の重さを双肩にかかえているのであり、彼女達の闘いは、自らの生命を守る闘いであると同時に、明確に本土に於ける二十数年間の闘いを厳しく問いかえす闘いとしてあり、僕たち自身を問いかえす闘いとしてあるのだ。なぜなら、本土における二十数年間の階級闘争の未熟な結果が、東南アジア人民抑圧、基地、公害、そしてその凝縮点としてこの沖繩の現実となっているから。

そして七二年本土復帰の裏質化であるところの国政参加、自衛隊派遣、本土独占資本導入という具体的問題に対する

僕達のあり方が、この一農婦によって問われているのはいうまでもない。

▲沖繩が今後「限りなき異議申し立て」をする存在として、その独自の存在(歴史的、地理的に所有した)を守るためには、血を流して反対抗議した七二年返還の「内容」の仕上げとしてなされる「返還協定締結とその国会承認まで、沖繩からの国政参加を鋭く拒絶する戦いしか承認まで沖繩における国会議員選挙を拒否する闘争、それしかつての教公二法闘争をはじめとする諸闘争の教訓から十分に可能ではあるが、その成功によってのみ沖繩は、ゆがめられた返還を押しつけた日本政府に対して限りなく「異議申し立て」をする権利を留保することが出来る。それを単なる政党のエゴイズムや個人的な我欲のためには、国政参加に積極的に参加する時には、限りなく「異議申し立て」の権利をみずから放棄するのみであり、七〇年代において予知される政治的、経済的、文化的もろもろのしめつけに抗しての戦い、被支配の歴史からみずから解放す戦いの思想と行動をみずから募き握って埋める以外のなにものでもない。限りなき「異議申し立て」をする存在として、沖繩が、その存在の意味を失なうて単なる地方県に解消される時、日本とのかかわりの中で問われつづけてきた「沖繩の戦い」

は、いきおい絶望的にならざるを得ないだろう。▼

この新川明氏（「沖繩タイムズ」編集部）の指題は、本土の闘いに一切幻想を持たず、沖繩の自立した運動の質がすべてに沖繩の民衆を啓発し、さらに本土の人間の中で沖繩の異議申し立てをまともに受けて立つ人間が実存するのかと鋭く

僕発して告達をいなのだ。

全軍劣の支援カンパを暴力的につぶそうとする左翼や、渡嘉敷島の住民を集団自殺に追いこみなおり続けている元軍人、沖繩が帰らねば戦後は終らないと語る人等は僕達にとって決して無縁でないし、無縁でないからこそ僕達は沖繩の異議申し立てをまともに受けなければなら

ない。

沖繩の十八日間を藍色の空と強い日さしの中で終えたが、その中で獲ち得た貴重な体験は、みずからの立場を明確にし、沖繩のゆがんだ日本人意識を変革させる一つのステップとなり得るだろう。

（関西大学公書研究会（仮称）会員）

## 沖繩関係出版文献目録

「ドキュメント、沖繩闘争」

新崎盛暉（亜紀書房）

「沖繩問題二〇年」

新崎盛暉、中野好文（岩波新書）

「沖繩返還と七〇年安保」

新崎盛暉（現代評論社）

「沖繩の民衆意識」太田昌秀（弘文堂）

「沖繩ノート」大江健三郎（岩波新書）

「沖繩 土著と解放」

石田郁夫（合同出版）

「沖繩 この現実 70年安保闘争の火花」

石田郁夫（三一新書）

「安保・反戦・沖繩」

石田郁夫（三一新書）

「シンポジウム沖繩」木下順二・日高六郎ほか（三省堂新書）

（本書の巻末に詳細な文献リストが掲載されている）

「誰か沖繩を知らないか」《第三世界》私論

村瀬春樹（三一新書）

「全軍劣反戦派―基地解体の拠点」

沖繩県反戦青年委員会編（三一新書）

「アメリカ戦略下の沖繩」

坂中友久（朝日新聞社）

「水攻めの沖繩」

沖繩問題調査会編（青木書店）

「アメリカの沖繩統治」

宮里政玄（岩波書店）

「ベトナム戦争の基地・沖繩の叫び」

藤田秀雄（潮流出版）

「沖繩白書」（法律日報3月号臨時増）

（日本評論社）

「沖繩の教師たち」 //（合同出版）

「沖繩問題入門」

沖繩返還同盟編（新日本新書）

「一九七〇年と安保・沖繩問題」

上田耕一郎（新日本新書）

「沖繩教職員会―復帰運動の核を探る」

関 広延（三一新書）

「沖繩以後の日米関係」G・L・カーチス著 神谷不二訳（サイマル出版）

「日本の黒書」 日本平和委員会編

「沖繩―政党と政治」

比嘉幹郎（中公新書）

「沖繩の地位」 国際法学会編（有斐閣）

「日本の領土」 高野雄一（東大出版）

「日米共同声明と安保・沖繩問題」

野村平爾編（日本評論社）

「沖繩の経済開発」伊藤善市・坂本二郎

（潮新書）

「沖繩言論統制史」 門奈直樹

（現代ジャーナリズム出版）

「沖繩問題と国民教育の創造」

森田俊男（明治図書）

「アメリカの沖繩教育政策」

森田俊男（明治図書）

「27度線の沖繩」牧瀬恒二（新日本出版）

「基地沖繩―返還のためのレポート」

琉球新報社編（サイマル出版）

「沖繩島」

霜多正次（筑摩書房）

「沖繩」

新里恵二（岩波新書）

「沖繩の歴史」比嘉春樹（沖繩タイムズ）

「沖繩の歴史」 東恩納寛惇(至文堂)  
「沖繩の歴史」 宮城栄昌

(NHKブックス)

「日本の民族問題」 藤島宇内(未來社)

「民族の悲劇」 瀬長亀次郎(三一新書)

「沖繩からの報告」

瀬長亀次郎(岩波新書)

「南島論」

吉本隆明

(「展望」 六一四四、七〇年二月)

「異族の論理」 吉本隆明

(「文芸」 六九年二月)

「沖繩の思想」 新里金福(品切)

「受難島の人がと」 瀧上泰子(未來社)

「沖繩風土記」 伊波南哲(品切)

(未來社)

「沖繩の民話」 伊波南哲編(品切)

(未來社)

「沖繩・暗い火花」 木下順二

(未來社)

「沖繩文化叢説」 柳田国男編(中央公論)

「海南小記」 柳田国男(角川文庫)

(「柳田国男全集」 筑摩書房)

「海上の道」 柳田国男(筑摩書房)

「折口信夫選集」(第2巻)

折口信夫(中央公論)

「伊波普猷選集」 伊波普猷

(沖繩タイムス)

「沖繩の民芸」 水尾比呂志ほか

(美術出版)

「沖繩・七〇年前後」

新崎盛暉・中野好夫(岩波新書)

# わたしの 研究ノートから

(一)

奈良盆地の東南、奈良県宇陀郡菟田野町大字駒畑に奈良前期と推定される寺院跡のあることが知られていた。

このあたりは「宇陀山中」ともいわれる程の山間地域で、寺院跡と思われるところは山の南斜面の畑地となり、時々瓦片の出土があった。しかもそのなかに葡萄唐草文の軒平瓦がふくまれていた。昭和のはじめの頃、畑地の一

部について調査されたことがあって、若干の礎石も残存していた。しかしどのような堂宇があったか、あるいはどのような状態で遺っているかについては知られていなかった。

今年の四月中旬頃、友人から寺院跡といわれる付近の畑地に焼けた土の見えるところがあるという話を聞き、早速現地を踏査したところ、一見して瓦を焼いた窯跡であることがわかった。

そこで発掘調査の必要を感じ、菟田野町当局及び土地所有者と話しを立、夏休みをまって実施する計画を立案し、八月十六日より二十五日までの十日間を予定し、学生諸君の参加を求めて発掘作業を行い、瓦窯及び金堂跡を確認することができた。

(二)

寺院跡のある場所は、標高約四百メートルの高い所であるが、寺院名すら伝えられていない。ただ該山神社の社家であった葛城家に所蔵する「宇陀旧事記」という古文書に「安楽寺、駒畑村、本尊阿弥陀如来、七堂伽藍あり」と記載されるのが唯一の文献である。だがこの文書の書かれた年代も不明。一方この寺院跡から北に連なる山を俗に安楽寺山と呼んでいることから、従来「安楽寺跡」または「駒畑廃寺」ともいわれてきた。

数年前「菟田野町史」の執筆を依頼された。この場所を見たときから、私は大きな関心と疑問をもった。

第一に葡萄唐草文の瓦が出土するということである。いうまでもなく、この文様は遠く西アジアで発生し、中央アジアを経て中国に、さらに日本に伝播した文様で、奈良感徳寺の本尊の台

座にこの彫刻があるのは有名。ところが、この文様を瓦に使用した例は極めて少ない。飛鳥時代から奈良時代にかけて多くの寺院が建立されたが、今までに葡萄唐草文の瓦が出土したといわれるのは僅か四ヶ所(五ヶ所に過ぎない)。このような特殊な瓦を用いた寺院は一体どのような構造と規模をもつ寺院であったのか。

第二に寺院跡の近くに瓦窯跡があること。年代からみて發露であろうと思うが果してそうであるか。また窯自体の構造はどうなっているか。

第三に従来から知られる若干の礎石とその配置からみると、かなり大規模な堂宇であったと想定できる。また外に礎石はないだろうか。また奈良前期に、このような山間僻地に大規模な寺院が建立されていたとすると、平安時代の天台・真言二宗に代表される山岳

仏教・寺院とは異った仏教・寺院の意義をどのように理解したらよいのだろうか。そして都の仏教・寺院の在り方との相違点を実証的に把握することができらうか。といった問題意識をもっていた。

(三)

発掘調査は僅か十日間という短期間であったが、大きな成果を挙げることができた。

先ずた窯は山の斜面を利用して構築した登窯で、灰原・焚口・燃焼部・焼成部・煙道など殆んど完全に残存していた。これは全長約五・五米、幅約一・五米の規模で、付近より均整唐草文・葡萄唐草文の瓦が出土した。それらは寺院跡で出土した瓦と全く同じ形式のものであった。

次に発掘した堂宇は本瓦葺入母屋造り、桁行五間・梁間四間の構造で桁行五一尺(一五・四五米)・梁間三四尺(一〇・三米)、瓦は均整・葡萄の両型式が使用されていたと思われる。なかでも一棟の建物に八枚だけ必要な隅切

## を瓦平軒整草唐葡萄 寺く茸

古代史の謎に挑むⅣ

教 善 干 網



安楽寺跡より出土した葡萄唐草文軒平瓦

瓦の完形品一枚が出土したことは貴重な資料であった。なおこの建物は規模・構造様式からみて金堂と判定して誤りなく、建立後焼失し、再建されることなく今日に至った。

遺物としては土製の螺髪(のり)の残欠、衣文のある塑像の破片や碑仏などを検出した。これらのことから奈良前期に山間僻地に本格的な寺院が建立されたことが

生きているであろう。

誰が建てた寺なのか。他の葡萄唐草文を使った寺院との関係はどうか。

幻の寺、安楽寺の追求は私たちの命脈のなかに

(文学部助教)

### 《書評》編集委員募集

関大の文化・イデオロギー活動の中心軸として  
本紙の質的向上のために、結集せよ!! (連絡先・七七六)



三月革命犠牲者の墓地 1913

坂本慶一著

「マルクス主義とユートピア」

―初期マルクスとフランス社会主義―

(紀伊国屋新書)

# 突出した思想としてのユートピアを復権

川崎一郎

## I

本書の意図は、まえがきによれば、副題にもあるようにレーニンの『マルクス主義の三つの源泉』説を念頭におきなが

ら、エンゲルスの『空想から科学へ』の中でありぞけられたはずの「ユートピア」が、マルクス主義の形成にとつてどのような意義をもつのかということ、「マルクス主義自体におけるユートピア

という問題を含む」としている。そして、これは、マルクス主義が、「科学的社会主義」と称することにより、硬化し、物化し、「科学の名のもとに歴史の必然性の信奉者となり、革新思想

としての弾力性を失ない、権威的教条主義へと転落していった。マルクス主義的自己疎外の標本ともいふべきスターリン主義は、スターリン個人の生みだしたものでなく、ユートピアを拒絶したマルクス主義自体の産物だといつていいのではないか。」と疑問を提出し、そこに思想の創造性・躍動性がなくなり、教条化と、エビゴーンネンの発生をみてとるのである。著者は、そうした「マルクス主義」

に、魅力を失ない、しかしながら、一九世紀にそしてまた、ロシア革命の当時もつていた、「マルクス主義」のもつ意味とのちがいは、一つには、『空想から科学へ』を八科学から空想へVのシエーマに転倒してみることで一つの路が開けるのではないかと、「三つの源泉」説の「フランス社会主義」との「ユートピア主義」とのマルクス主義の連関を対象化しはじめるのである。

すなわち、あまりにも、硬化し、形骸化した、客観主義的、科学主義的「マルクス主義」の「精神」をさぐるということであり、「ガイスト」で、わるければ、マルクス主義の「変革のバトスの源」を「ユートピア」に求めようとするのが本書の意図だと思ふのである。

そうして、その中で、「マルクス主義の三つの源泉の一つとみなされているフランス社会主義がいかなる意味においてマルクス主義の源泉となっているかを追求」し、「国内はもちろん、海外においても皆無である」「初期マルクスの思想形成過程」をフランス社会主義との関連において組織的に追認した仕事（一六七頁）でもある。

以下、この坂本氏の仕事の検討と、その成果、方法、疑問について述べてみよう。

## II

先づ、本書の構成は、I「フランスの革命思想とユートピア」では、ルソー、バブーフ、サン・シモン、フーリエ、プランキ、ブルードン、をあげながら、そこにながれる「自由と平等」をその視点として叙述し、IIでは「初期マルクスとフランス社会主義」とし、その具体的な関係を検討し、III「史的唯物記の形成とフランス社会主義」においては、一つの焦点として、「経哲手稿」を中心に、マルクスの「方法」あるいはブルジョワ社会の批判的視角の共通性あるいは差異性を主に論じている。そして、IVにおいて、フランス社会主義のある意味では集大成者であったし、マルクスと直接的な相手として、マルクス主義の形成におおきな媒介となったブルードンとの対比を「初期マルクスとブルードン」として展開している。そして最後に、「共産党宣言」を、一つのマルクス主義の「節」とみなし、初期マルクスのあるいは當時の社会主義諸思想に対する一つの総括としてあった「共産党宣言」が、如何に、フランス社会主義との対決をとおし、それをとりこんでいるか、あるいはユートピア思想を排し、排しながら、「経哲手稿」で展開したAユートピアVのなものが、具体的にえがかれていくかということと、そこにフランス社会主義の浸透をも

## III

みることができるとしている。

ここで、先づ、広松渉氏の意味ではなくして、一体、「三つの源泉」についてその個別的な検証が意味をもつのかどうかという疑問があるのである。マルクスにフランス社会主義がインパクトを与えたことは決して否めない。マルクスがフランス社会主義者の言葉を使ったのもあり得ることであるし、初期のマルクスがフランス社会主義思想と激しくぶつかったことは歴史的事実でさえあり得るだろうが、著者は、客観主義に、あるいは科学主義におちいったマルクス主義に活力を入れるべくユートピアとの関係、そして、それ自体の歴史の中に烈しい息ぶきをもつフランス社会主義との関係をさぐるうとしたのであろうが、実は著者自身の抑くマルクス主義そのものが、かなり固定された常識マルクス主義を前提としたものではなかったのだろうか。

それは、ブル・パウエル、フイエールバッハ等の烈しい対決を経ながら、同時に、「わが国の政治的現存の否定ですら、近代諸国民の歴史の物置小屋ではすでに、ちりにまみれた事実として見いだされるのである。」といった後進性にいらだち、フランスをみていたマルクスが、あらたな変革の主体を求めながら、しかし、理論的には、「人間の解放の頭

脳は哲学である」と言う時、マルクスの思想形成において、ドイツの哲学、あるいはイギリスの経済学のもつ位置とは自ずからちがってくる筈であり、著者は、それを、「三つの源泉」の個別的な検証を、あるいは、その区別をすることにより、逆にその連関もよく見出されるところといった按配でしたのであろうが、それが、「三つの源泉」が、マルクスの思想のどれだけ内在的な「三つの契機」に転じたのかということに対する無自覚、として表われているのではないか。

すなわち、マルクスの思想が、単に、ヘーゲル哲学の継承性の上にフランス社会主義を継承したものを接ぎ木したのでは決してなく、一個の思想的発展として見みる中から、どのような主体的な契機としてフランス社会主義をとらえねばならない筈なのである。

こうした方法は著書のような場所ですら、類似箇所を抽出するという方法に転落する危険性を孕んでいる。

例えば、「私有財産制批判」の項で「つまりマルクスにおいては、現実認識としての『人間の自己疎外』に、その根本原因としての『私的所存』が対置され、最後にその解決策として『共産主義』が論証されることとなり、思弁的にみちびきだされる」。そしてブルードンは「私有財産はブルジョワ社会の基礎であり、本質である。それゆえブルジョワ社会の

あらゆる矛盾は私有財産に起因する」と考え、「所有とは何か」「それは盗みだ」としながら、「ブルジョワ社会批判の視点を私有財産にすえ、その止揚によって、すなわちブルジョワ社会の機構変革によって労働者階級の経済的、政治的解放を企てる」一八四〇年のブルードンの意図は、マルクスが一八四四年の『手稿』において到達した結論とまさに一致する。」とするのであるが、ここに、

「はく(たち)はこの著書の難点の一つを見ない訳にはいかない。『経哲手稿』におけるマルクスの疎外された労働と私的所有の関係は次のようである。「こうして疎外された、外化された労働によって労働者は、労働に疎遠な、労働の外に立っている人間の、この労働に対する関係を生みだす。労働者が労働に対する関係は、資本家(あるいはそのほか労働の主人がどう呼ばれよう)が労働にたいして、外化を生みだす。私的所有はこうして、外化された労働の、すなわち労働者が自然および自己自身に対する外的関係の所産であり、結果であり、必然的帰結である。」

われわれはたしかに外化された労働(外化された生活)の概念を国民経済学から、私的所有の運動からの結果としてえた。しかしこの概念の分析にさいして明らかになることは、たとえ私的所有が外化された労働の根拠として、原因として

現れるにしても、それはむしろその帰結なのであって、ちょうど神々もまた根拠的には人間の知性の迷いの原因ではなくて結果であるのと同様だということである。

私的所有の発展の最後の頂点においてはじめて、そのこのうい秘密がふたたび現われてくる、すなわち、一方ではそれは外化された労働の所産であり、そして第二にそれは、労働がそれをおして外化する仲介手段であり、この外化の実現であるという秘密である。

ここに、われわれは、マルクスの、『経済学批判序説』から『資本論』へ貫なる方法を見ることはできないだろうか。すでにここでも、ブルードンとの直接的な対決をとらず、マルクス主義のガイストが形成されたのを窺うし、そして、マルクスは次のようにも言っている「国民経済学は労働を生産の本来的たましいとして、そこから出発する、しかもなお、それは労働にたいしてひとつ与えず、私的所有にたいしてひとつ与える。ブルードンはこの矛盾から、労働のために、私的所有に反対する結論をした。しかし、われわれはこの外見上の矛盾が疎外された労働それ自身との矛盾であること、そして国民経済学はただ疎外された労働の諸法則を言いあらわしたにすぎないこと、を見抜く。」と、すなわち、ブルードンが直接的に私的所有に反

対していったのに対し、マルクスは、如何なる矛盾の帰結として私的所有、及び賃労働が存在しているのかを問うたのであり、そうした構造を突きすすめては、「ブルードンの要求するような賃金の平等でさえ、ただ、今の労働者が彼の労働にたいする関係を、すべての人間が労働に対する関係へと、転化するだけである。社会はその場合、抽象的資本家として解される。」だけなのである。

水田洋氏(朝日ジャーナル「書評」)は、「もし、著者が『マルキストではない』ということが、ノンコミットメントを意味するならば、それは主体的機動力の放棄につながらないであろうか。」と疑問を符し、その手紙さが、「フランス・ユートピア思想をEJCやキブツに結ぶつたり、マルクスとブルードンのちがいを、ドイツとフランスの国民性のちがいにむすびつたりする気軽さを生んだのではないか」とおそれているが、実は、おなじような気軽さがマルクス主義の内容的な展開をみることなしに「マルクス主義」を固定化した上で、フランス社会主義との相違点を検討するといふ、マルクス主義の常識を逆転させてみようとしながら実は常識のマルクスが前提となっていたのではないだろうか。

#### IV

一九六〇年の安保闘争の全国的な高揚をおして、あたらしい潮流の形成が、十年を経た現在、その間の運動の蓄積が、その間運動としてもつていた反スターリン主義運動の地平より、プロレタリアートの組織性を昂めなければならぬ段階においてはほぼ三つの傾向をもっている。一つは、「社共にかわる党の建設」として、実は、自民、社会、公明、民社、共産に次ぐ、第六党の存在を願望する傾向、次に、コミンテルンの解体とフランスムへの勝利、徹底した世界的な党派闘争の不充分性としてあらわれた。一九一七年以降の世界を否定的にとらえかえず中から、世界的なプロレタリアートの主体、世界形成、組織することをおしてあるいは、それを組織するための二党であるとか、賃労働者を全面的に廃棄するところ根拠をもった暴力を組織すること、綱領の形成を追求していくこととしている部分、そして、もう一つは、徹底した、下からの叛乱をし、そのための一つのスローガンとして、即時的に、ソビエト、であるとか、コミュニン、あるいは、そのための理論を展開している傾向、であり、とりわけ、六八・六九年において、全国の学園にバリエードがつけられていたころは、この傾向と、この傾向に内在するエネルギーは、しかし、不断に、即時的なコミュニン思想、ソビ

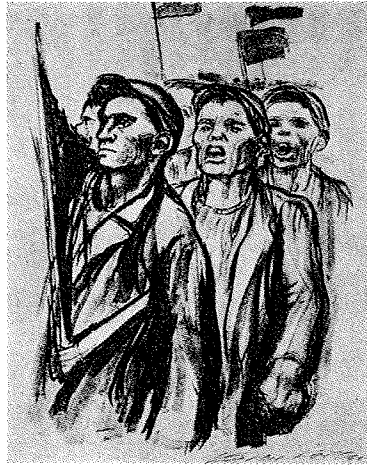


エト論、あるいはソビエト運動論にエネ  
ルギーが激しいが、ゆえに結びつけれ  
れ、そして、解体されていった。ここ  
で、坂本氏の著書を二とおりの読み方が  
ある。一つは、六八〇六九年の全国の学  
園でのあのうねりと、坂本氏の主体的機  
動力としてのユートピアをその中にもつ

ていたからこそ、「生きた運動」があっ  
たとし、ユートピアの再評価、『空想か  
ら科学へ』の逆説テーゼ（科学から空想  
へ）として主体的なとらえかえしとして  
運動も肯定的にも評価し、そのように読  
める場合であり、もう一つは、いわゆる  
マルクス主義の内容が、「共産主義を組

織すること」「共産主義の運動」そのも  
のが、大きな転期にきたことを意味して  
いるのではないか。いままでの『共産主  
義』では決定的にとらえかえせない地平  
へやって来ており、すなわち、「共産主  
義」の形成、あるいは、その基盤の歴  
史、社会の総対象化であるがまた、現実

の運動そのものも、そのことを突きだし  
ており、その意味で、フランス、ユート  
ピア思想を内在的にとり組もうとした  
（意識的であれ、無意識的であれ）本で  
あるとするものであり、やはり、そう読  
み込むことによつてこそ、本書の発展が  
あるのではないかと思われる。



デモンストレーション 1931

梅本克己著

「唯物史観と現代」

（岩波新書）

# 実存主義的自己疎外からの回復

隅田

『唯物史観と現代』は、新書版とはい  
え、現在、唯物史観＝マルクス主義に課  
せられた思想的課題の「核心」に答えよ  
うとする問題意識によつてゐる。これは  
氏が戦後の主要な論争「主体性論争」の  
旗と手して以降一貫して飲まない問題意

識——歴史形成における基底としての人間、個人——唯物論における人間の課題を追究した著作『唯物論と主体性』『人間論』『マルクス主義における思想と科学』『過渡期の意識』の延長線上にある。

ところで氏が問題提起した戦後の時代背景とはどのような世界として氏にせまったのであろうか。二・一ゼネストの挫折、四九年闘争の大敗北、五〇年のコムンフォルムによる日共への批判、国際派と所感派の対立、六全協、ハンガリー動乱、スターリン批判、砂川、教職法闘争、安保闘争、中ソ対立、反戦闘争の展開に至る時代。それは「漆黒の闇を通して幻想としての国家をかきまいた、そして……」という時代までの運動における主体的原理の喪失の時代であった。これは日本だけの特異な事態ではなく戦後著しい世界の一般的な悲劇的な事態でもあった。そしてこの悲劇的な事態は、政治——社会参事への核をますます破局的に進展させていった。変革を志向する左翼組織で、とりわけ自主独立路線「ナショナルリズム」人の収斂への転換を行なった日本共産党の事態はどますます事態を混迷させたりこのプラグマチックな修正によってとりつくりうごきにみられる危機の現象の時代——脱線なき世界——の一つの典型であった。梅本氏はこのマルクス主義思想の創造的全体性の喪失の危機の深化に対

決してきた日本の数少ないマルクス主義哲学者の一人である。

まさに『現代』とは、プロレタリアートの主体性の喪失の時代であり、矛盾の展開を自分の内部に、構築しなければならぬ時代といえる。類的存在としての人間の解放への「一つ」の途程として、これは現代の実践的、思想的課題である。このことは、マルクス思想の原理（唯物史観と労働価値学説）を、過渡期の世界を外的対立に至少化し、プロレタリアートの内的矛盾の展開、媒介を埋葬、風俗させた今日のマルクス主義運動の混乱、俗流化の退嬰的な情況の支配的現実の破壊が、「マルクス主義の復権」を、「現代」を、あきらます。それは歴史を貫ぬいて消えないロシアの革命の光茫を否認せんとするがための一つの作業である。氏は、この著作で ①現代とは何か ②思想とは何かを問うことによって今日の課題にせまらうとすること、ところが氏は、スターリン主義への対決が疎外論再評価に短絡し、スターリン主義との「対決」Ⅱ「現代」と規定している。そこに『現代』の陥没を見出さざるをえない。何故にこの逆転が生じたのか。

この小冊子を買っている氏の基本的な構えは、「マルクス主義の理論体系を支える歴史観、唯物史観」というものが、どのようにして出来上ってきたものなの

か、その形成の過程を今日の立場からたしかめて、その体系が崩壊したというならば、何がどのように崩壊しているかを判別する場合は基礎的な知識を提供してみようということである。即ち現在のマルクス主義とは一体何なのかを内部的に強くつきざさうということにある。更につつけて現代の課題について「この本は唯物史観の崩壊をたしかめるといふところからはじまったわけだが、唯物史観にとって現代とは、スターリン主義の崩壊、その過程が生み出しつつある課題の集積」の危機的情況の根源的追究を、哲学の形で整理し、超克する原理——マルクス主義の復権——へ向けて、マルクス主義、運動力における「核」を喪失した退嬰的情況を生産し続ける思想状況を彫出する。それは、階級社会において、支配階級の永々と支配的となる思想の物質的根拠、とくにイデオロギの終焉論に端的に表われているマルクス主義批判を断罪し、マルクス主義の退廃、そして危機の、出口なし、の情況、そのものを止揚せんとする問題意識によっている。しかし氏のこのモチーフは、その平易な、整理された文体からは、疎外「現象」の指摘以上ではなく、疎外「現象」を廃棄しうる主体性の原理の展開を見出すことが困難といえる。

「第一章」において、ニーチェが一九世紀に予言したニヒリズムの到来の状況

を語る。「人間のつくり出したものが人間の手を離れて独立し、逆に人間の自由を束縛してくるといった現象がおこってくるのも、本来社会関係というものがそういうものだからであろう。高まりと、階級社会における肉体的労働と精神的労働との分離Ⅱ矛盾の発生する時代状況を書く。そしてこれを包括した形で「一九世紀に神が死に、二〇世紀に人間が死んで、いま人びとはその死んだ人間をよみがえらせようとして再び国家への回帰や宗教の必要が説かれているわけだが、国家や宗教はそこでどんな役割を果たすのだろうか。この問題は、唯物史観がその誕生以来、終始一貫としてとりこんできた課題である」と、この小冊子の中心的核、即ち唯物史観の形成前を明らかにする。

「第二章」において、唯物史観の誕生、生い立ちにあって、その前に唯物史観と唯物論との関係の重要な問題提起を行う。唯物論によつて人間は人間自身の実態の状態を認識することが出来るのか。さらにフォイエエルバッハや、マルクスは、これらの唯物論をきりひらくにあつて宗教の批判からはじめるその原点の情況を展開する。

それが「第三章」の「哲学の改造」へ展開させていく。フォイエエルバッハの人間の感情の本質を究明し、八疎外Ⅴとしての宗教を批判していく、哲学を明らかに

して行く。

フョイエルバッハの「革命的」意義のある哲学を、唯物史観の基本的態度の出発点、即ちヘーゲル哲学批判、止揚する「先駆的」哲学の役割はマルクスが乗り越える「過渡期」の哲学を明らかにする。――「幻想を生み出している一切の關係をくつがえせよ」とは、ただ幻想を破壊せよということではないことだ。その幻想の中に疎外されている自分自身を現実の自分たちの手にとり戻せということなので、その取り戻しを解釈によってではなく、現実を世界に実現させようと思つたら、必然的に実践の世界にふみ込まねばならないということである。その幻想の中に疎外された自分たち自身がいるのだ」。そしてプロレタリアートにおいてこそ哲学が存在することを解明する。

「第四章」では、「ブルジョア社会の解剖と経済学」について、人間と労働とおして、労働と疎外を科学的に位置づけていく。これはプロレタリアートの内的矛盾の展開、媒介を通して、共産主義的の人間とはどのようなものかという課題の深層に深く入りひらいていくか。それは、一人の人間にとっての世界観とは、何か、思想とは何か、を問う。

「第五章」では、「唯物史観の成立」について疎外を止揚する原理の基礎を追究していく。「ドイツ・イデオロギー」

を座標軸にすえ、唯物史観を基礎付けるものが、マルクスらによって解明された資本制生産の基本的原理――即ち資本制社会を科学的に論述するとともにプロレタリアートの存在の、人間解放の世界的役割を展開する唯物史観の原理を考察してみようとする。しかし「ドイツ・イデオロギー」がまだ未分化的に星雲状の唯物史観の核をもつて、「唯物史観」とするのでは余りにも砕が狭まざるのではないだろうか。いや、それより「ヘーゲル法哲学批判」「ユダヤ人問題」等、初期の批判書――マルクスの思想形成の核の欠落がそこに見出しえることこそ、氏の「疎外」/「思想」/「國家」/「観」を反映している。

「第六章」では「唯物史観の課題」においては、今日のマルクス主義の危機の原因を解明していき、スターリン主義によるマルクス主義の歪曲の現状、論理をえがきだし「現代」の課題を次のように提起する。唯物史観に課された二〇世紀後半、さらには二一世紀の課題は、つねに先進資本主義国の革命から遮断され、人類解放というその巨大な任務を、後れた物質的条件の上で負わされた後進国の革命、そして必然的に何らかのみを生み出さざるを得なかったこの過程を、先進資本主義国の大衆がどのようにして断ち切つてゆくか、ただそのひとつに「ばらばら」である。そこに「唯物史観」

現代を「焦眉」の課題として、無原理的横断の時代にマルクス主義の原理を展開していくという提起にもかかわらず、教養的マルクス主義解釈についてしか語りえなかった。

氏は余りにもジャーニリズム的にスターリン批判以後のソビエトに、史に中国の文化大革命へも触れる。ところが氏による革命的「哲学」が「革命論」に応用するとオプテズム的にいとも簡単に社会民主主義的に後退的な対応を行なっている。これでは氏のスターリニズムを克服し、マルクス主義の原理「國際革命」(「梅本」、プロレタリアート独裁への復権の基礎付けをめざす論理が、とうてい現代のマルクス主義の退嬰的情况を打開しえず、同次元からの発言であつて不協調音を感じざるをえない。前者の問題意識が後者への発展的にとらえれずに断絶されているのである。スターリニズムの今日的表現形態としての「平和共存」「平和的革命」であるこれらの虚像を資本制に対する虚像と同じく根底的に否定するものとして規定されてこないで超階級的に提起されてくる。余りにも外的対立の現象に、氏のいう「未分化現象」を自から呈しているといえよう。

何故にかかると「現象」を呈せざるをえなかったのか。

梅本氏の思想的、問題提起の「核」。

は、①マルクス主義を、人間の自己疎外現象の分析、人間の回復への針砒であるという視点。②「疎外された労働の上に立つ以上、理論はたとえそれが自然科学であっても、疎外から逃れたいとはできない」③「人間の自己疎外とたたかうもののはたかいたの武器、たたかいたの道をもつて非人間的な疎外からまもらねばならない」との提起にみられるように、人間の自己疎外からの回復――主体性論争といえる。そこで、社会科学、革命運動の理論での疎外的状況からの回復――理論の革命的変革を成遂げなければならないのである。④この疎外からの回復にあるべき現実世界への接近は弁証法的方法論によってである、というものである。

ところで、プロレタリアートの主体性の自己喪失の「現代」、主体性原理について、六〇年代、谷川雁は「大衆の始原的エネルギー」を日本の固有の位相に民衆論として、空間的に展開させようとした。藤本進治は、「労働」について資本制下のプロレタリアートの二重性的矛盾(私的商賈所有者と全体的人間への解放――階級的人間との矛盾)としてとらえその展開としての「場」/「行動」の論理の提起であった。

これらは、疎外「現象」の魔界しうる現実の「場」/「行動」の構築化である。しかし、梅本氏の自己疎外論は、疎外「現象」を実存主義風に指摘していること

しかいようがない。人間の非人間化現象・労働の非労働化現象・自然の非自然化現象を指摘し、疎外をハネ返し、人間を回復せよと。

このことは、氏が、マルクスの思想の核心・労働の矛盾から唯物史観の出発点としての労働価値学説の欠落していることによるだろう。更にマルクスの思想形成の核ともいべき初期の批判書の欠落は、氏の國家観についても指摘しえる。

リヴァイアサンとしての國家について、漆黒の闇を通して幻想としての國家をかいた今日、梅本氏の國家観は、マルクス主義的な國家観とは評価しがたい。梅本氏の國家観は、國家が生産力と生産関係の統一を強制的に維持するための支配階級の権力機構という生産過程からの現象論の規定であり、自己疎外からの回復の延長線上に位置付けられる実存主義風な國家観に収められている。

マルクスの「ヘーゲル法哲学批判」は、「近代國家の觀念性」をとき明した（梅本）のではなく、宗教批判という形態で宗教に現われているブルジョア的原理の矛盾をあきらかにしたといえる。フオイエルバッハ、青年ヘーゲル派の宗教と直接対立し、否定するヘーゲル法哲学批判、反宗教闘争は、「ヘーゲル法哲学批判」のようなブルジョアの原理の矛盾をあきらかにしえるものではなかった

のである。自からの生産力、生産物との対立―自己疎外の形であらわれは、主体的原理の矛盾と捉えらわれるのである。であるならば、宗教を批判することとは、その幻想性を暴露するだけではなく、まさに批判的闘争という形で現われる主体的原理そのものの矛盾をあきらかにし、この矛盾を展開させることといえる。

闘争、批判を現実的闘争に転化させること。マルクスが一連の△批判▽を宗教批判からはじめたのは△批判▽を通じて、生産力の発展の△幻想性▽の虚像を暴露するだけでなく、疎外の特殊様式・形態の宗教に表現されたブルジョア的原理への△批判▽への現実的運動として、自からの主体的原理の確立への運動へと形成させていく方向性の確定であった。

このことは、資本主義体制が単純に経済的体制を意味するのではなく、それは生産における人間の矛盾そのものの発展であり、その質的飛躍を意味する。決して梅本氏のいうような「近代國家の觀念性」をあきらかにするのではなく、まさにフオイエルバッハであり、青年ヘーゲル派の役割であった。

「常民」の疎外としての体制、体制から差別という疎外をうける「常民」という日本の社会構造での日本のプロレタリアートの発生過程を、「資本の本源的蓄積の章」として単なる経済⇨資本⇨企業

（独占資本）⇨プロレタリアートの拡大として書かれるのではなく、まさにヨーロッパ的範囲とは異なる発生過程を、「常民」としての生活の変化・転化の歴史を日本の社会構造として過去の週及とし書かれることが△主体性原理▽にせまりうるのではないだろうか。プロレタリアートの解放は、生産関係からの解放⇨自己疎外からの解放という史的唯物論そのものがブルジョアの俗流の支配的現実とは無縁の地点にあるということである

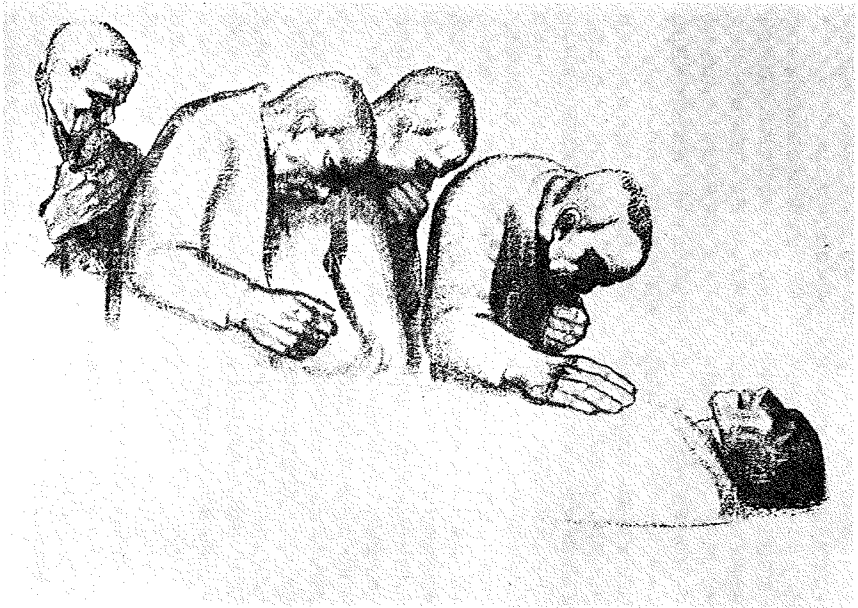
非合理主義⇨愚△反动思想として無思想的に規定する生産力⇨近代主義は△近代▽をヨーロッパの民主主義⇨市民社会という意味で、△近代▽⇨資本主義制度そのものへの対決を必然的に欠かざるをえない。日本の社会構造の総体においてそういう典型的△近代▽は存在しないし、拒絶している。そこで日本に存在するはずの日本の△近代▽とはいかなるものかも解答しえない△近代▽主義者といえよう。

日本の社会構造で、疎外の必然的結果としての複数の疎外を、支配階級から差別というかたちで疎外を受けている者―特殊部落民、在日朝鮮人、癩病、企業犠牲者の疾病、辺境の漁農民、流浪のプロレタリアート……彼等は「常民」として日本の資本主義の基底⇨「底辺」構造での、差別、分裂、貧困などの複数の疎外を受けていた。この疎外の矛盾を、

△アナキー▽に、△沈潜▽として、特殊地帯に陰影をもって△生▽きた者こそ、日本の社会的構造そのものにせまりうる可能性を逆に萌芽しているといえないだろうか。

人間⇨商品であり、商品⇨人間である交換価値の面での労働者主体と、価値の止揚を追究する階級的人間の面での労働者主体の矛盾の展開の世界と、人間でも商品でもない経済外的差別集団の複数の疎外を負った世界とを、まさに△現代▽の世界としての運動の軸としてあるのではないだろうか。

△組織された階級の暴力▽が「資本の世界」と「人間の世界」の相克熾烈な現代に、一切の幻想と、既成の意識⇨「資本の世界」の破壊への一筋の路上を行使したということ、これが△現代▽を掌握する現実的過程であった。



リーブグネヒト追悼のエチュード 1919

黒田寛一著

## 「毛沢東神話の破壊」

こぶし書房

# 「反スタの虚妄」の産物

久礼 勉

建國二一周年を迎え、プロレタリア文  
化大革命での造反の風を、昨年「九全  
大会」でもってひとまず総括した中国の  
毛・林体制は、当分安定しているように  
見える。七〇年代に入り、ますます注目  
されている中国の内実は果してどんなも  
のか。日本政府は日米共同声明により、  
明確に、中国、朝鮮と敵対する姿勢を表  
明した現在、我々にとっては、更に、中  
国を避けて通れないし、中国の解明は、

ますます重要な政治的・経済的な問題とし  
て、いやそれ以上に人民としての尖鋭的  
な課題として、歴史V―現代にせまりう  
る内容として登場している。

毛沢東に象徴される「人民中国」を分  
析するには、まず、「中国革命」につい  
て進めていかねばならない。革命の形  
態、期間の長さから、歴史上類のない中  
国革命は、その国内における革命の主体  
であるプロレタリアートの数の不足、未

成熟により、革命の主体を、大部分、農民に求めねばならなかった。それ故、都市の工場プロレタリアートという組織された革命主体による、武装蜂起―ブルジョア権力打倒―プロ独樹立へと進む道を通らず、「半封建・半植民地」といわれた列強帝國主義の侵略にさらされた後進國中国においては八割以上を占める農民（特に貧農・下層中農）が革命の主体となつたのも当然と言わねばならないかもしれない。

毛沢東は、当初から中國革命を社会主義革命として位置づけていたのだらうか、断じて否である。毛沢東は、農民のもつ土地に対する小ブル的願望を見ぬき、地主の下で、抑圧と貧困にあえぐ小作農に土地を与え、それを守り抜くことに依拠するという大衆運動主義を買きつつ貧農を結集し日本軍國主義侵略者を追い出し独立を克ち取るという「民族・民主革命」を意図していた。（毛沢東選集の文章を読めば毛沢東の二段階革命論Ⅱスターリニストの本質が随所に見うけられる。即ち出来る限り多数の人民を組織し、思い切つて立ち上らせて日本侵略者の支配を断ち切り、独立を闘い、ブルジョア民主主義革命を頭に浮べていたのである。（ついでながら、日共Ⅱ民青は、今だに、米帝よりの独立・平和・中立を叫んでいる）。

毛沢東は、毛の軍事論文に賞かれた一

本の信念。それは「鉄砲より國家権力が生かされる」に典型的に表現されており、これを支え、つて毛は、武装をあくまでも解除せず、農村に根拠地を建設し、いわゆる解放区型革命を押し進め、勝利したのである。そこには、党に指導された武装した人民が根拠地を防衛し敵の包圍討伐を粉砕し更に進んで敵を追撃し、解放区を拡大していくという、防衛→対峙→攻勢という過程をたどりつて党一軍（紅軍）―統一戦線（これはきわめて広範囲であり、ブルジョアすら含んで）の陣型を強化し、武装闘争を、あくなき執念でもって貫徹した。

しかし抗日戦争に勝利した毛は、その勝利を新民主主義革命と呼び社会主義革命とは位置付けていない。何故なら、彼は抗日戦争勝利後政府を連合政府として樹立し民主革命を押し進めブルジョアの権利を克ち取ることを望んでいた。

そこには私有財産の廃止でなく保護を意図しており國民黨をも含めた民主連合政府を頭の中に描いていた毛は民族経済を發展させ半官半民なる國家資本主義を建設するということすら述べていた。彼にはロシア革命の勝利の後に訪ずれた、列強帝國主義の包圍干渉、反革命の困難を知つてか知らずしてか、それを逃れる道として破壊され植民地化されていた中国をまず強大な國家にしていきながら徹底した民主主義革命を押し進め社会主

義へと平和移行させようとする二段階革命論が色濃く反映されていた。もし抗日戦争の勝利に酔つて人民の武装を解除して國民黨と連合していたら決して現在の「人民中国」は存在しないだろう。「人民の軍隊がなければ人民のすべてはない」と述べているごとく、毛は國民黨が強く求めた解放区人民・八路軍・新四軍の武装解除に直観的反抗を示しあくまでも人民の軍隊を確保しながら國家建設を進めた。解放区の全国への拡大による新國家建設に恐怖した、アメリカ・蒋介石の破壊により、毛はあやうく放棄しそうになつてきた革命を続行し四年にわたる内戦に勝利した。

その革命戦争を一國にとどめたことは、「中國の革命」の理解に後進國革命の限界として把握しておく必要があるだろう。一九四九年十月一日人民中国は建国された。この政府はもはや國民黨を含んだ民主連合政府ではなかった（蒋介石は台湾へ逃亡した）。しかしながらプロレタリア独裁とも呼ばれない、「人民民主主義独裁」なるあいまいな名称を使っている。ここにも毛沢東が現在に至つても中国の現状を明確に述べない根拠が表われている。私はこんな中国の指導部のジグザグ路線の中で多くの困難と犠牲を耐えて来た中國人民のエネルギー、英雄性、献身性の並々ならぬ偉大さに頭が下がる思いがする。

それ故、毛沢東は、「人民、ただ人民のみが世界の歴史を創造する原動力である」と、全面的に大衆路線に指導を接木し、党組織を、たえず大衆の中へ溶解させる、新左主義が生えず、ノンセクトなる名の無政府主義Ⅱアンチセクト、党組織の規律にしばられることを嫌うという小ブル的思想が出てきており、毛思想の影響を早く克服せねばならない面であるといえる。）

このような中国の出生の秘密を若干ふり返れば、現在の中国の指導部からは、言語とはうらはらな、右翼性を孕んでいる毛沢東の声明やマルクスⅡレーニン主義とは縁もゆかりもない、次元での中論争など出てくるのもあながち不思議ではない。

ところで黒田寛一は、このような誤謬に満ちた現代中国の毛・林体制に対して、マルクスⅡレーニンの古典をひっぱり出してここは違つていなか、マルクスの言うとおりにやっていると、いつく黒田の得意とする「反スタ観念論」でもつて中国をあれこれ論じている。

けれども現代のような、過渡期世界においては、「一國と同様「社会主義社会」なるものをマルクスⅡレーニン主義の原則により建設されるはずはない。マルクスのお理論は世界革命の勝利を前提として未來社会について論じているのである。か

かる現代過渡期世界の止揚に向けた主体的推進構造の構築を計ることであり、その過程にある現在、世界的視野より中国を把握せねばならない。黒田のような「反スタ」ばかり叫びつゝ「反帝」を忘れた教祖様には、毛澤林は偉大なカギでも七億人民の軍師でもなく単なるスターリニスト官僚しか写らないだろう。(一方、日本に於けるマルクス主義者と自称している毛沢東思想家の中にある常識はずれの誤りに対する黒田の批判は肝に命じておく必要があるだろう)。

本書においてプロレタリア文化大革命以後、とりわけ七〇年代に入った現在の中国の内実について唯物史観と黒田の場合反スタ史観でもって書かれており、言葉の革命性のため、今だ新左翼の中にさえ存在する中国への幻想を克服するには良い著作である。その中でも何度でもくり返して述べている点は「過渡期社会の把握」についての解釈であろう。

現在の中国社会を分析してみると、彼に言わせると「中国版を着たスターリニストに歪められた社会主義への過渡期(社会的分業及び階級矛盾が存在し従って階級闘争が存続している社会)の疎外された形態である」そうだ。

さらに続けて、「毛沢東思想」を一言で述べると、スターリンを先祖にもちし連官僚に左翼の反撥を試みるが、一国社会主義二段階革命論に革命的言語をつけ

たしてスターリニズムの克服をしたように見えるが決してそうではなく、クレムリンに巣食う官僚どもの「平和共存政策」に「人民戦争路線を接木した、暴力革命主義に歪曲し、限定されたエセ・マルクスレーニン主義である。決して「帝國主義が全面的崩壊に向い、社会主義が全世界的に勝利する時代のマルクスレーニン主義」なんかではないのである。誰でも、マルクスが、資本主義から社会主義への過渡期(プロレタリア独裁期)について述べている「ゴリア綱領批判」を少し真面目に読めば、中国の社会主義社会なるものましがいがすぐに理解出来るので詳しく論ずることはないがこのようなマルクス主義のイロハすら歪めて理解し、大きな顔をして執筆している現代の毛沢東主義者達の厚顔無恥、程度の低さにはただあきれ。彼らに対して今後理論闘争を推し進めていかなば中国の像を鮮明にすることはできないだろう。

七〇年代、全ての革命的左翼が権力闘争を叫び、どのような権力を奪取するかを真剣に考えている現在疑問を投げつけられてはいる社会主義・共産主義を再度原点よりとらえ返し我々が創ろうとする社会は一体どんなものかを検討し、実現に向けた陣営の構築に早急に着手せねばならない時、社会主義の本質の把握にス

ターリニズムが最も多く表われるものがあり、その克服に努力を払わねばならない。『即ちプロレタリアート独裁国家への生産手段の集中(プロレタリアの国有化は社会主義への物質的な前提が価値法則を現実と止揚するための経済的基礎が形成されたことを意味するにすぎないにもかかわらず、かかるプロレタリアの国有化を直接に社会主義的所有そのものとみなすという誤謬。この結果、権力の問題で国家が死滅するはずの社会主義的段階においても「社会主義国家」が内外情勢の故になお存続するという反マルクス主義的な主張へと結びつくのである。』(本文P 86/P 87より) 社会主義社会の

経済の本質を簡単に述べると「過渡期プロレタリア國家さえもが死滅し、階級対立も、工業と農業との社会的分割も、価値法則も止揚され生産手段の共同社会的占有を基礎とした計画的な社会的生産及び労働時間に基づいた分配が目的意識的に実現される社会のことである」とマルクスは述べた。常識的にも現代中国の北京指導部の社会主義論がいかに錯乱してひどいものであるのが、黒田は、口をすっぱくして述べている。

このような毛沢東思想のスターリニズムの誤りを、マルクスレーニンの著作よりの技ずりでもって飾り立てるため、ますます混乱しており、あげくの果てに毛沢東個人を神格化してしまつた中国の

指導部は、遠くはず沖話のくずれさる日を迎えねばならないだろう。

現代、過渡期世界の根底的止揚を目指す視角は、矛盾解明の視点を毛沢東の矛盾論のごとく事物・対象の羅列でなくマルクスの「質労働と資本」の本質矛盾をその根本にすえて、階級矛盾を基礎に構造的に世界を把握することである。

現実の問題として今秋の政治攻防の環として鋭く問われている「入管体制」の把握の視点を「民族問題」一般としてあれやこれや分析しているけれども民族矛盾は、「帝國主義國と植民地從屬國との外的對立において、後者そのもの(植民地・從屬國)における、階級矛盾および國家形態を分析することを放棄したところから生みだされる現象論的誤謬としてあはき出すことを基礎として立体的にとらえ返さねばならない。つまり、民族の外被をもって表わされる差別・抑圧は、実は、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立を隠し、国益國防の下にプロを屈服させつつ、ブルの支配が強化されて行き、排外主義にプロが抗し切れず負けることは、自からの階級性を捨てることであり、國際主義の眞価が問われるものである。プロレタリア國際主義の立場を一点のくもりもなく明らかにし、現象面では國境を越えるインドシナ革命戦争とその後盾となつてくる中国が、人民解放軍を世界赤軍まで意

識を發展させること、その主体の構築が幻想化・霧散化したインクタンク・ナリズムを、革命の現実の世界をまさに現実化するといふことがいえるだろう。

最後に中国の現代化革命論に対する考えを若干まとめておきたい。中国の革命論が明らかにされている論文としてわれわれが手に入れられるものは、林彪が一九六五年に発表した「人民戦争の勝利万才」がよく知られている。そこで不十分ながらここに貰かされている中国指導部の路線についてコメントをのべたい。

ベトナム・パレスチナ等の民族解放闘争の高揚の現象面の賛美から、本年五月二十日の毛沢東声明にみられる、全くの平板な客観情勢の把握、断固支持するの乱発や全世界人民大団結というかけ声だけに終始しており、中国革命の教訓である暴力革命万能論にとどまっている。階級闘争、とりわけ先進資本主義国におけるところのそれでは闘争を指導する前衛党の組織づくりや、マルクス主義の立場よりの世界の経済的・政治的軍事的の把握、情勢分析、政治暴発、権力奪取を目指したプロレタリアートの団結の質の強化、手段として使うべき暴力の奪取を自指したプロレタリアートの団結の質の強化、手段として使うべき暴力の保持革命の軍隊Ⅱ赤軍の建設など、解放を自指すプロレタリアートの歴史的發展にそれと不可避的に衝突するブルジョアジーとの決戦

が、だんだん近づいている今、革命を現実の世界として構築するため、その一つの戦線である中共スターリニストとの「世界革命」をめぐる党派闘争はまさに重要な要素であろう。彼らが言う「世界革命で世界の都市を包囲する」という中に表われている限界、つまり、後進国・植民地での武装ゲリラ闘争により、主要には米帝とそのすべての手先を打ち破ろうといった風の毛沢東の根拠地革命論の世界へのアテハメが何の疑いもなく出てきており、ここにあるのは、世界を軍事の見地より分け、戦闘配置を決めて、自国の一国社会また路線の限界を一切止揚出来ず、ましてや世界プロ独、世界社会主義を展望した中で世界革命の理論にはなりえないことは明白であろう。

かかる毛Ⅱ路線の中にある、軍事力学主義や、武装闘争形態の絶対視の与える影響が強く反映している現在、階級闘争を軍事一般や武器一般で語るという誤りに陥りやすく、武器のエスカレートに短絡させる誤謬と錯誤傾向を生じている。地味で困難な仕事、例えば、帝国主義支配の新たな段階の分析を、軍事的な支配構造がメルクマールとなるけれどもそこに含まれた多くの支配構造の明確な把握をあいまいにしてはいけない。帝国主義段階に入った戦後世界は、法的に独立した後進国家は、種々の条約を通じて

政治的・軍事的に規制されたり、帝国主義の資本輸出や「経済技術援助」によつてあるいは、資本または技術導入とかによつてその下部構造が制約されたりするつまり形式的に独立しているも、実質的に植民地化されるという後進国の矛盾は何ら解決されず、中国の民族独立や反米愛国路線でもって独立しても結局は、スターリニストの指導力、民族主義的なワクに入れられて国家・民族の止揚は一切なしえない。突破する方法は何か？ 黒田は、何ら答えていない。「過渡期世界」を「革命の現実性」へ「転化」、「革命の世界を構築することが「現代」に課せられた、現在の歴史である。

(社会学部二回生)

参考文献

- 毛沢東選集 一〜四巻 東方書店
- ゴータ綱領批判 マルクス 岩波文庫
- 連統革命と毛沢東思想 菅沼正久 三一新書
- 人民戦争の勝利万歳 林彪 付録
- 「雑誌」人民中国 七月号
- 全世界人民は団結してアメリカ侵略者とそのすべての手先を打ち破ちろ。毛沢東 五月二〇日 声明

二七頁よりつづく

的解放の最初の条件である、という意識もイギリス労働者階級のなかに眼ざめさせることが、在ロンドン総評議会の特殊な任務である。(S・マイヤーとA・フォークトへの手紙) といつてもいい。これを政治的と呼ぶなら呼べ。すなわち逆の問題としてはどうして人民族問題Vとして現象するのかわという問題があるのである。これに関しては、マルクスの「ユダヤ人問題について」あるいは「ヘーゲルの法哲学批判」から「経哲手稿」ドイッ・イデオロギー」を経ていくマルクスの思想形成の中から、よく学び得るだろうと思う。問題は、例えば、ナショナルな下からの幻想が、何故自らを規制し、抑圧してくるのかということであり、八公僕Vとしての、全体の奉仕者であつて一部の奉仕者でない、公務員が、逆転して、一部の奉仕者になるのかという構造の解明が理論的な問題として、実は設定されなければならない問題なのだ。体系的な批判は、おろか批判の視点も、「駄目だ」というくらいに言えないけれども、だいたい、本書によつてか、何かをいうというのがまづかいなのだ。



高島喜哉著

「民族と階級」

(現代評論社)

ルソールの社会契約国家説

はやしはじめ

△「国家」は「戦後私たちにとつて、先ず△民主主義国家」としてあらわれた。△平和憲法△と、△軍隊△をもたない△平和国家△としても、それは、一見弱々しく私たちに感じられた。△ソニー△とか、△オリ

ンピック△での△国産△の奮闘ぶりには、いくらか元気づけられはしたけれども。ハンガリー、アラブでの戦争は、しかし、△平和な民主主義の国△の△桑畑△と△日の丸△がよく似合う△ところ△で満足に読めない△しんぶん△のみ

たようだ。  
先づ私たちにとって、△国家△は次のようにあらわれてきた。  
日本の国家権力の構造とその性格に規定されて安保闘争は次のような段階

を経て進展していった。

(1) 反対意志の全国的組織化の段階。  
宣伝教育を中心にした啓蒙活動から次第に大規模な集会、街頭デモへ発展してゆく。

(2) 議会の幻想性に対して「平和と民主主義」というより大きい幻想性そのものをかかげての全国的政治闘争の展開される段階。集会、街頭デモを中心として闘争が進展する。その過程で警察の妨害も加わり、国家権力の暴力化に、大衆の暴力が発生する。これを契機に議会の幻想性がバクろされ、闘争は次の段階へ発展する。一・二七国会突入は議会の幻想性のバクろの糸口を与えたものとして位置づけるべきである。しかもそれは議会の幻想性だけではなく既成左翼政党の幻想性もまた、同時にバクろしたことは重要である。

(3) 国家権力そのものの暴力と直接対決する段階。国家権力がますます暴力化するのあいまって、大衆の街頭デモのより一層の暴力化の中でブルジョワジーは安保をなごがなんでも成立させねばならない必然性から、議会主義の枠内では即ち幻想性を保持したままではそれを通過させることに成功しえず、遂に自ら議会の幻想性をすて「単独裁決」という国家権力の本性である。暴力に訴

えざるを得ない(五・一九)。

この民主主義破壊の暴挙は、プチブルの民主主義意識を大きく刺激し、闘争は反動粉砕闘争の次元から、急速に内閣倒閣争へと転化する。この段階において闘争の直接対決しているのは暴力そのものである。大衆の暴力化はさらに発展し、プチブルの街頭行動と部分的な労働者の実行行使によって、遂に内閣危機が出現する。安保闘争はこの段階まで進展し、権力との衝突を含みながら、従って萌芽的な革命的高揚を生み出しながらも、その高揚を生み出すことなく敗北していった。

(安保闘争の政治理論としての総括 — 政治過程論 — 六一 年京都府学連執行委員会)

これは、「政治は経済の集中的反映である」ということのドグマチックな理解「経済的不況↓労働者の生活状態の悪化↓労働者階級の高揚」という経済決定論では決して経済的には「高度成長」といわれた時期における運動の高揚に対して何ら語るべきことができなざりばかりか、「安保闘争においては、全学連は既成政党の無能というよりは、闘争の意識的回避の中にあつて何となく局面を主体的に打開しようとして、独自でそのための戦術を追求した。」であり、また「政治過程の独自

の運動法則を捉えることができず、政治情勢の急激な展開の可能性について予測を、従って政治闘争における決定的な時点の把握ができなかった。運動の総体的対象化するのを試みたのである。そして上記の引用の中に、私たちが共有する源の「国家論」とそれに対峙し、あるいはそれを超えようとする主体をまきまきすることができるのである。

その後、私たちは、「幻想としての国家」に關する吉本隆明の著作を、神山茂夫、三浦つとむといった系図の上で観ることが出来る。もっとも、「幻想」としての「国家論」を「国家論」一般と読みまぢがえたり、藤本進治の「革命の哲学」に接ぎ木して、「世界」を観てしまったりするトンチンカンな性急者も私たちは観てしまっている。吉本は梅本克巳の「生産力と生産関係との統一」としての生産様式を維持するための支配階級の権力機構であつて、これが国家の本質である。」という見解に対して、そうではなく、「国家の本質は共同的な幻想である。この共同的な幻想は、政治的国家と社会的国家の二重性(二面性ではない)の錯合した構造としてあらわれ、」としてゐる。また、「戦争期のように、社会的国家としては高度資本主義国家としてあらわれながら、政治的国家としては古代遺制を強く引きずつた天皇制国家としてあらわれるといふ矛盾した構造をもちう

る」のはなぜかという経験から出発しているようにも思われる。そして、「国家論」というものは、普通論理で考えられる一種の世界同時革命論やコスモポリタニズムみたな形に陥ちこんでゆき、いつまでも理念が具體の現実に到達できないという結果を生みます。また逆に地域

社会論理でゆきますと、毛沢東主義のようになアジア・アフリカ後進国革命論になつてゆくわけですね。多くの考えでは、国家の理論が、いかに構築されなければならぬかといえは、特殊な具体的な地域国家の把握から出発した論理が、一つの転換をほどかせば、ただちに普遍的な国家理論の問題に転化できるという位相を、原理的に獲得できなければならぬと思ひます。」という問題は、「民族」の問題なり、具体的な「朝鮮」の問題、あるいは琉球、沖縄の問題についての二つの傾向に対しての問題 視角である。

以上は、実践的契機あるいは、経験をおした「国家」への肉薄の私たちのもつ断片である。前者が理論的な自己対象化としてあり、その中で絶えず、国家へ肉薄していき構造があつたとすれば、後者はその肉薄していく国家の幻想そのものをえぐり出す「視角」を与えつづけて来たといつていいかも知れない。

実践的課題は、どんどんすすんだ。「国家」と「法」の前提的概念の上での

操作しかならない「場」での、生身の「実践」の人間「法」が、あきらかに不法なことをやり、否、「国家」が不法「法」に對することに対する方法さえないことに對する、「私」たちの方法「法」をええ私たちの中にはなかつた。

「国家」が不法「法」は、「外化」された暴力「法」として、「呼」びだされた暴力「法」として対決をせまってきた時、「ホン」シツは幻想で、軍隊、官僚、機動隊「それ」は、「ジツ」タイだよ。」などといつてすましてゐる人は、万年平和、末法万年、スタ千人の人たちである。

### 高島善哉

は「民族と階級」の中で本書の意図が、ナショナリズムという言葉の非常に多義的で人によればある種の感情であつたり、あるいは思想であつたり、要求であつたり、あるいは主義主張であつたり、一つの運動であつたりするが故に、混乱があき、ナショナリズムで「論」が低迷するのだといひ、もう一つの根拠に、英語を使う風土と、日本語の風土のちがいだのである。

そうしたことが、ルリとあまり関係のない、「ルソ」観」から、三浦つとむ津田道夫から骨ぬきした「国家意志論」が導きだされてゐる。

しかし、高島氏は、実は、あれや、これやといつてゐるけれども結局は、「資

本論」の第一巻の誤解から生じただけの「國家學」以下の國家「論」なのである。すなわち、価値法則から貨幣が出現したように、商品の一般の等価としての貨幣と、市民の一般意思が國家だということである。「貨幣は經濟的世界における國家權力であり、國家は政治的世界における一般の等価である」(一九〇頁)というのである。

阿呆らしくて、二の句が次げなくなるのが腰の出である。

一体、この老大家は、戦前、戦中、戦後の世界、國家、社會を觀てこなかったのだろうか。マルクスが、青年ヘーゲル派との烈々たる闘争の中で、書いた、「ユダヤ人問題について」「聖家族」「ドイツ・イデオロギー」あるいは、ブルードン、スマイス、リカードを批判する中で書いた「經濟學批判」などをどう読んでいるのだろうか。

あげくの果てで、マルクスの「經濟學批判」の序説が、マックス・ウエーバーの「理念型」という方法と一緒にとらえて言っているのは、戦後の日本の學問的遺産でさえ無にするものでしかないのではないのか。

もちろん、今はやりのエンゲルスとマルクスのちがいが、云々に言及したり、マルクスが「ユダヤ人問題について」で述べた、「完成した政治國家は、その本質上、人間の猿的生活であつて、彼の物質

的生活に對立している。この利己的な生活の一切の諸前提は、國家の領域の外に市民社會の中に、しかも、市民社會の特性として存続している。政治國家が眞に發達を遂げたところでは、人間は、ただ思考や意識においてばかりでなく、現實において、生活において天上と地上との二重の生活を営む、云々」についてももちろんふれたりはしている。けれども読み方は全くまちがっている。この箇所は、パウエルが、ユダヤ人が國家に政治的解放を求めないで、ただユダヤ教信奉の自由を要求するのは、まったく虫のいい話とする事を批判し、政治國家からの解放なしにも、人間の宗教的解放はあり得る。なぜならば政治的國家からの解放は、なんら、人間の解放を意味しないからだ。

そして、ユダヤ人問題が、ドイツでは、神學的な問題であり、フランスでは立憲制の問題であり、北アメリカ州では現世的な問題であるとするのである。すなわち、政治的國家のもつ基礎にこそ、その問題があるとした訳なのである。しかしながら、わが、高島氏は、この「ユダヤ人問題について」の考察も、単に、貨幣の國家の相似性についての説明でしかないように思われる。例えば、二重性を二面性と解するよう。

それでは、貨幣と國家の相似性などという発想は、どこからでてくるのであろうか？ それは、おもいつきでしかない

高島氏自身「アイデア」だといっているところである。それを、「經濟學批判序説」の第三節の方法がどうのこうのとコケおどしを垂しているにすぎない。

この間の、國家論の中心は「幻想としての國家」であり、しかも、それがもつ根拠との關係で、その幻想が、いわば太古より、包摂されておき、恣意的な市民の意志の単なる合想では決してないことの問題であり、この点で三浦つとむが問題の鋭さにも拘らず、現實の國家に対しては説明することしかできないことになってしまったのである。高島氏の場合、マルクスが「經濟學の方法」で述べた、一般的な人口から入っていくことのまがい説いたことが、いっこうに判っていないようである。

また、高島氏は、近代に入って始めて、國家が成立したということ前提に述べているように想われる。すなわち、市民がいなくて高島國家は成立しないからである。それで、当時の「後進國」ドイツでの、キリスト教的國家は、國家とは言われないだろうか。高島氏の場合、別に市民でなくても、よきそうである。なぜなら、氏自身もいうように、典型的な市民社會も市民も實在ではないのだから、だから、市民のかわりに人間でもいざだろ。おおよそ、意志をもちあわせぬ人間なぞいはいはずだから。そうだとすると、高島國家論はマルクスが批判

したルソーばりの社會契約國家という自然主義になる。そうすると、マルクスが繼承したヘーゲルの方法も、經濟學を始めた、すなわち、社會の中ではじめて個人としてできるという認識もすべてくつがえすことになる。

ついで、そういう自然主義的國家觀は、当然に、自由競争社會「ブルジョワ社會を前提としているのであるが、市民社會を普遍的なものとしてとりだし、人間意志と意志の合意が國家としているが故に、当然に、いくら、世の中が變わろうが、國家は國家として存続する」という共產主義國家が成立するのは高島氏の言い方では当然な論説がなりたつ。これは意志説派のおもいもかけぬ「陥罪」だろう。

「民族と階級」という本の中から個々のまがいをとりだしていけばきりが無い。例えば、國民という概念は、國家と民族の中間をなすものだから(二二頁、三〇二頁)、至るところでおもいつきが横行している。國民などは、國家の概念に規程されて、でてくるものなのだ。

民族の問題にしても、マルクスは、決して一般的にあつかっていない。「アイランド」の民族的解放は、イギリスの労働者階級にとって、抽象的な正義や人道的感情の問題ではなく、彼ら自身の社會

〈書 評〉 バックナンバー / 掲載論文一覧

- 第2号 (S.40.11.10)  
 金哲著「韓国の人口と経済」 市原亮平  
 ヘンリー・ジェイムス著「智慧の樹」 小西愛之助  
 クロード・エドモンド・マニー著  
 「現代フランス小説史」 重本利一
- 第3号 (S.41.2.12)  
 柴田高好著「政治学の課題と政治思想」 田島克巳  
 植田逸雄著「異端宣言」 大貫照一  
 清水義弘著「現代日本の教育」 植松健造
- 第4号 (S.41.7.1)  
 篠崎著「小墾事件の農民たち」 石川ひろし  
 大学設置基準改善要綱の問題点 友松芳郎  
 堀健三著「ソ連経済と利潤、社会主義経済  
 の方向性」 上島 武
- 第5号 (S.43.5.29)  
 W・ベンヤミン著「複製技術時代の芸術」 小川 悟  
 佐伯彰一著「文学的アメリカ」 田村民夫
- 第6号 「三太郎の日記」とその周辺  
 (S.43.7.5) 小山仁示  
 「カサルスとの対話」 下程 息
- 第7号 「ユートピアだより」  
 (S.43.10.4) U.モリス著 (岩波)  
 杉原四郎 (経)  
 「科学思想のあゆみ」  
 C.H.シンガー (岩波)  
 島尾永康 (社)  
 「情況と現代マルクス主義」  
 一ロシヤ、マルクス主義と  
 「ドイツ・イデオロギー」の周辺  
 市原亮平 (経)
- 第8号 「ヴェーバー社会科学の基礎研究」  
 (S.43.11.12) 内田秀明 (岩波) 石尾芳久 (法)  
 「エロスの文明」  
 マルクーゼ (紀伊口屋)  
 八木俊樹
- 第9号 「都市の論理」 羽仁五郎 (勁草)  
 (S.43.12.9) 庵谷寿男  
 「解ってまるとか」 福田恒存  
 名取英史 (文)  
 編集者への手紙 内田秀明
- 第10号 1918年2月革命 西ドイツ SDS  
 (S.44.5)  
 特集 学園闘争とわれわれ  
 a) 全共闘バリケードを構築せよ 滝田 修  
 b) 自己否定の論理

- 評者  
 c) バリケードに賭けた青春  
 d) 叛逆のバリケード  
 e) 今日の大学問題  
 f) 大学闘争の発言 (雑誌と単行本) } 書評
- 第11号 「69出版の傾向と思想状況」  
 (S.45.1) 一僕たちの意識の周辺—  
 手記、a) 告発された者の自己弁明  
 ひとり的高校教師  
 「ゲバルトの論理と抵抗権」
- 第12号 「世紀転換期のドイツ」  
 (S.45.5) マルクス主義 久松俊一  
 「大正デモクラシー」 小山仁示 (文)  
 「幸徳秋水」 飛鳥井雅道書 (中公)  
 小林良彰 (同大)  
 「世界資本主義の歴史構造」  
 河野健二 (岩波) 荒井政治 (経)  
 「革命とコミニューン」  
 滝村隆一 (イザラ)  
 林 一  
 私の研究ノートから 瀧干善教 (文)
- 第13号 「日本の洋学史の研究」  
 (S.45.6) 有坂隆道 (創元社)  
 島尾永康 (社)  
 「社会主義の教育」  
 F・Jキング (福村)  
 海老原治善 (文)  
 「日本の技術者」 星野芳郎 (勁草)  
 原田二郎  
 「マイホーム主義」について  
 十・一
- 第14号 「友の姿と真なる風景との出会いへ  
 わたしの観た風景 篠田正浩  
 表現の《美学》形成について  
 川村信彦  
 マルクス主義の再検討について  
 下程 息  
 「思考の原理」の確立を  
 力石定一  
 書評/丸山松幸著「五・四運動」

〈追記〉

これまで、本紙は、不定期であったので、号数が重複していたり、とばしていたことがあったので一応整理してみた。過去を振り返りながら発行までの苦勞等思い浮べるとともに、新たな意欲をもって、本紙の質的向上と、定期刊行化を勝ちとってゆく中から「文化不毛の地=開大」という汚名を破壊していかねばならない。